



ロム・ヴルピッタ 著
ムッソリーニ
中央公論新社 2000年

朝日新聞は、拙著『ムッソリーニ』を評して、このように述べていた。

放縦，混とん，反秩序。政治もまた，イタリア式なのか。そんなありきたりの印象に収まらない人物が昔いた。この本の主人公である。

朝日新聞に拙著の書評が出ることをまったく期待していなかった私は、そこまで読んだとき、一種の満足を感じたのであった。やはり、この本を書くことによって私が伝えようとしたメッセージは届いたからである。イタリアに対する日本人の一般的なイメージには、好感と軽視が奇妙に混在していることを、長年の日本での滞在の結果、私は感じてきた。イタリア人の生活様式は素晴らしくて、羨ましいであろうが、イタリア人はずるくて怠け者だ。イタリアは美術の国であろうが、秩序が悪く、めちゃめちゃの国であろう。

私はムッソリーニについて書くことによって、「そんなありきたりの印象に収まらない」イタリアもあることを訴えようとした。したがって、私の意図が、少なくとも「朝日新聞」の評者に理解されたことは、喜びであった。

ムッソリーニの人物をはじめとして、イタリアの近代の歴史はあまり知られていないことも痛感した。私は歴史学者ではないが、歴史や政治思想の趣味があって、ムッソリーニとイタリアのファシズムについて多くの書物を読み、それなりの知識を身につけてきた。また、イタリア人として自分の国についての歴史観も、当然持っている。私から見たムッソリーニについて論ずれば、常識と違ったあと一つの彼のイメージ、イタリアのイメージを紹介したい気持ちになった。そして、ムッソリーニについて書くことを決心した。

この本はベスト・セラーにならなかった。しかし、出版から約二年間経った今日でもコンスタントに売られている。そして、多くの読者は私の持論に納得しているそうである。たとえば、朝日新聞の書評は、「私たちはムッソリーニもイタリアも、実はほとんど何も知らない。読み進むうちそれに気付く」と、述べている。私の持論は全面的に受け取るべきではないだろう。偏見と独断があるだろうと、私も認めているが、少なくともムッソリーニとイタリアについて考え直すきっかけになれば、幸いと思います。

この本が取り組んだテーマは大体三つであった。その一つは、人間としてのムッソリーニの紹介である。後一つは、ムッソリーニの政治理念とその思想的な背景の紹介である。最後に、イタリアの歴史の中でムッソリーニの位置づけを試みることである。この三つのテーマを集約するのは、本の副題「イタリア人の物語」である。というのは、彼の間物語や、その物語を支えた彼の理念は、イタリアの歴史と深いかわりがあるからである。

まず、「物語」のことを述べよう。ムッソリーニは貧しい家族に生まれて、両親が払った犠牲のおかげで良好な教育を受けることができたが、小学校の教師としての凡庸な生活を蹴って、スイスで放浪の生活を経験し、そこでレーニンをはじめとして世界の革命家と交わり、ついにイタリア社会党のカリスマ的な指導者になった。第一次世界大戦へのイタリアの参加を提唱したことで、社会党から追い出され、戦後少数の仲間とファッショ党を結成し、三年間の闘争の結果、政権を獲得した。その後、二十年間イタリアに君臨し、全世界に評価された政治家となったが、第二次世界大戦の武運が傾いたとき、軍事クーデターによって失脚し、とらわれの身となった。だが、盟友ヒトラーによって救出され、政治の舞台に復活したが、ついに負けて、愛人とともに殺害され、さらし者にされた。それに、にぎやかな女性交際や、何回もの投獄経験や、決闘、暗殺未遂、活発なスポーツ活動等を付け加えると、彼の激動の人生はまさに冒険の小説のように面白いことである。

彼の人生を二つの段階に分けて語ろうとした。最初、天下を取った鍛冶屋の息子の出世物語である。彼は、晴天の霹靂のようにイタリアの政界に出現し、破竹の勢いで新しい世代の代表者として旧世代の政治家を追い出し、政権を獲得する。反面、ムッソリーニの後半生を一種の悲劇として描いた。彼は政権を取るや、急に変身し、無頼な革命家から立派なステーツマンになり、自分の天命を意識し、イタリアの精神の権化であることを信じるまでにいたった。そこから彼の非人間化の過程が始まる。この過程は独裁の政治学の観点から分析することも出来るが、私は「孤独」という人間ドラマとしてみた。その終焉に、自分の失敗の自覚や、孤独な死があった。

第二に、ムッソリーニの政治理念に言及して、その形成にダンテ、マキャヴェリ、マツィーニの影響を指摘し、イタリアの政治思想の本流との関係を証明しようとした。

最後に、ムッソリーニの悲劇は新生国家イタリアの希望と挫折を象徴することを私は感じている。だからこそ、イタリア人は彼を否定しても、彼を忘れることはできない。

(Vulpitta, Romano 経営学部教員)



山岸博執筆、山口浩文編著

栽培植物の自然誌

北海道大学図書刊行会 2001年

原始真核生物と光合成細菌との共生によって生まれた植物は約4億年前に陸に上がった。4億年の陸上植物の進化の中で約6千万年前にそれまでになかった新しいタイプの植物(草本植物)が生まれた。草本植物は現在地表の3分の1以上を覆っている。一方、このようにして広がった草原において、動物界でも全く新しい進化が起こった。地球の乾燥化による森林の減少によって、草原で二足歩行する新しい動物が生まれた。約500万年前のヒトの誕生である。ここに草本植物とヒトとの出会いが始まった。

500万年間続いている草本植物とヒトの関係は、1万年あまり前に起こった野生植物の栽培化すなわち農耕の起源によって画期的な共進化の段階に入った。最初に栽培化された植物が西アジアのコムギなのか、東アジアのイネなのかははっきりしない。しかし、これらの2種を含めてヒトの主要食糧は草本植物しかもイネ科草本で占められている。栽培植物に支えられて、ヒトの数は爆発的に増加した。まさにこの本の“はじめに”に編者が記しているように、ヒトは現在地球上で最も繁栄した種となっているのである。それは、人類が家畜及び栽培植物との間で共生関係を維持することによってもたらされたものである。

この本は、人類と共進化の関係をとりよようになった栽培植物について、どのようにして野生植物から栽培植物ができあがり、なぜ現在の特徴を持つに至ったかを明らかにすることを目的として企画された。そのために、栽培植物の遺伝・育種学の第一線研究者がおのおのの研究成果を15章に分けて紹介している。全体は大きく、栽培植物の種分化と遺伝的多様性、栽培植物の成立と伝播、栽培植物と文化の共進化という3部に分けられている。“はじめに”にあるように、この本は「作物のルーツ」をおもしろおかしく紹介するような四方山話や挿話を羅列したものではない。マジな研究者たちが、地味だけれどマジな研究成果を記述したものである。だから、この本を読んで内容を理解するには、ネットをクリックして手軽な情報を入手するよりはるかに根性を必要とする。

この本の中で私は、栽培ダイコンと野生ダイコンの関係を論じた。ダイコンはピラミッドを作った労働者が元気を出すために食べたと言われるぐらい古い栽培の歴史を持っている。日本でもタクアンや切干ダイコ

ンなどの保存食にして一年中利用されるほど、古くから極めて重要な野菜であった。このダイコンがどのように栽培化されたか、誰も明確な答えを出していない。一方、日本も含めて世界各地に野生のダイコンが広く分布する。日本の野生ダイコンは海岸部を中心に自生しており、「ノラダイコン、ノダイコン、ハマダイコン、弘法ダイコン」など色々な名前で呼ばれてきた。この日本の野生ダイコンについて、前世紀初頭の著名な植物分類学者牧野富太郎氏は「ハマダイコン」という統一した和名をつけた。同時に彼は、ハマダイコンは栽培ダイコンが畑から逃げ出して野生化したものであると定義した。日本の野生ダイコンは栽培ダイコンの子孫であるというのである。

我々は栽培ダイコンと野生ダイコンの関係を調べるために、細胞質にあるミトコンドリアの遺伝子の差に注目した。ミトコンドリアの遺伝子は母親からしか、子供に伝わらない。この特徴を利用して人類の起源を調べたのが、有名な「ミトコンドリアのイブ」仮説である。ミトコンドリアを調べると、日本の野生ダイコン(ハマダイコン)の多くには、栽培ダイコンにほとんど見られない特有の遺伝子があることがわかった。このことは、ハマダイコンは栽培ダイコンが野生化して生まれたものではないことを明確に示している。その一方で、詳しい調査の結果、日本の栽培ダイコンの一部にはハマダイコンの細胞質を受け継ぐものがあることがわかった。典型的な例は、舞鶴市の特産でありながら今まで起源が不明であった「佐賀賀ダイコン」である。この事実は、日本人は大昔から、単に大陸で成立した栽培ダイコンを受け入れて利用してきただけでなく、野生種を栽培化して独自のダイコンを作り出すことに成功したことを示している。

研究は進展している。我々は更に世界的に見たときに、栽培ダイコンがどのように生まれたか。日本の栽培ダイコンは全体としてどのように形成されてきたか等を明らかにしつつある。ダイコンとヒトとの共進化の全体像が描き出される日は遠くない。

朝食もとらずに大学へ来て、地べたでいきなり昼メシに食らいつく若者の蔓延。牛肉の産地を偽り、国家の金をだまし取る企業モラルの横行。そうした状況にあっては、栽培植物や家畜と人類との共進化など、どうでもよいことかも知れない。しかし、急激な人口の増加は、ヒト・作物・家畜の関係を真摯に考え行動することを、50年以内に確実に諸君に迫る。それに備えるためにも、健全な知力と体力を今培う必要がある。

(やまぎし ひろし 工学部教員)

